
ちょっぴり、しょっぱいチョコレート

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよっぴり、しょっぱいチョコレート

【Nコード】

N7708Q

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

某ゴンドラ・メーカーの支店に勤務している鳥居比沙子。勤続十三年の大姉御の彼女にも、ようやく春のきざしが……？
バレンタイン・デーですからね。

どこにも掲載していないBL「おまえが嫌い」シリーズ番外編。
でも、書いたのはちよっぴり、二年以上前です。

鳥井比沙子は、洒落た紙袋をぶら下げたままそのショーケースの前で立ち止まっている。周囲は混雑して、しょっちゅうぶつかられているにも関わらず、鳥井が動く気配はない。まるで親の仇でも見つけたような眼差しで、その中身を睨んでいた。が、じっさいの鳥井の頭の中はそんなに物騒ではない。むしろ、くだらない事で悩んでいると行って良かった。

(やっぱり……別に贈るほうがいいのかしら)
その脳裏に浮かんでいるのは、一人の男の顔。その顔の持ち主をどう思えばいいのか鳥井は自分自身の事であるにも関わらず悩んでいる。

とつとつ、ショーケースの向こうから店員が可愛らしく、いくぶん怪訝そうに声をかけてきた。

「お決まりでございましたら、お伺いいたしますが」

「あ、い、いいえ!」

やっと我に帰ると、鳥井はそそくさとその場を離れていた。そんな自分に赤面する思いだ。

(ああ、やだ!)

百貨店が全館こぞってバレンタイン商戦に沸き返っている。地下の食料品売り場のスイーツ・コーナーはなおさらだ。鳥井はそこに自分が勤めている支店の男連中全員分のチョココレートを、女子社員代表で買いに来た。せっかくの休日だが、後輩二人にそんな事はさせられない。それに、この十年以上ずっと鳥井がその役目をやってきた。むさくるしい男共の舌の好みを、全部知っているのは自分。予算は一人350円で、その中から選ぶのは大変だ。二時間ばかりウロウロしただけで、鳥井はすっかり疲れきった。7センチヒールのブーツの中で脚は悲鳴をあげて、ちよっと一休み、と鳥井は百貨店の中にある喫茶店に入って行った。

席につくなり、ふー、と男みたいに大きなため息をついて足を伸ばす。ついでに春先の服も、と欲張ったのがたたって、かれこれ三時間以上も百貨店にいた事になる。喉はすっかり乾ききって、店内の暖房が暑くてたまらなかつた。冷たい飲み物を頼むと、もう買いたい忘れがないかを確かめるために、何種類もの紙袋の中身を数えていた。支店全員の名前を口の中で呟きながら、紙袋から、紙袋へと移動させていく。その作業の間には、いつのまにかテーブルにオレンジ・ジュースが載っていた。それを一気に半分ほど飲み干して、またため息をつくとき、今度はテーブルにだらしなく顎を乗せて全身の力を抜く。

(どうしようかなあ……)

やっぱり、それを考えた。

鳥井はもう、三〇代の大台をとくに越えている。顔立ちのはつきりした美人で、背も高くスタイルもいい。が、まだ独身。田舎の親はそろそろ心配も通り越して、もはや見合いの話も持ってこない。その気がない娘に悪戦苦闘し、親の方が疲れきつたらしい。それを、鳥井はむしろ有難がっている。男なんて、面倒臭い　というほどの経験もないが、鳥井にとっては恋愛よりもむしろ、仕事の方が断然面白すぎたのが悪かつた。本来が姉さん気質の鳥井にとって、現在の勤め先は文句なくいい職場だ。短大を卒業しての新卒入社。勤続年数十三年の支店の大姉御、という立場に怖いものはない。下手をすれば、支店長でさえもが機嫌をとってくる。それだけの仕事の実績を、鳥井は積み上げていた。

男たちは、いずれ支店から出て行くのがその会社の慣習だ。全国に支店がある、某ゴンドラ・メーカー。仕事の出来る男から、どんどん異動していく。もちろん全員ではないが、八割は居着かない。そういう中で、常に支店の雑事をとりまとめて事務業務を円滑に行えるようにしているのが、転勤とは縁のない女子社員だ。支店長権

限で採用された、彼女らは全員地元出身者。そういう訳で、鳥井はもはや支店の最古参から数えて二番目。支店の中身について鳥井の知らない事はほとんどないといつていい。

そんな鳥井も、べつに最初からそういう姉御だったわけではない。新卒入社の際は、むしろ世間知らずの初々しい女子社員だった。それが、職場で男ばかりの中で揉まれ、その連中の面倒を見ているうちに姉御に育った。男はみんな、手がかかる！ というのが鳥井の感想だ。それに鳥井は、派手な容姿に関わらず恋愛にほとんど縁なく社会人になつている。だから、一度だけしか恋愛経験がない。その相手とは、仕事優先の生活にいつの間にか終わってしまったって、恋愛の修羅場も経験しなかった。根が、淡泊らしい。むしろ、そうでなければ男ばかりの職場に十三年も勤めてなどいられないし、頼りにされもしない。

だいたい、職場に結婚相手を探しに来た後輩たちは、いつの間にか辞めていた。そういう彼女たちの気持ちは、鳥井には理解しがたい。鳥井にとつて支店の男供はみな、ただむさくるしくて手のかかる、タツグを組んで仕事をする仲間としか思えないからだ。いわば、戦友。

そう考える事自体、鳥井はずいぶん変わつている。変わつているといえば、鳥井は爬虫類フリークである。飼えるならば、今すぐでもイグアナか何かを飼いたい、と思つているが現在の一人住まいのマンションは、ペットは観賞魚でさえもご法度。仕方がないので諦めている。が、代わりにしばらく猫の世話をしていた。

ふわふわの毛皮に包まれた、白と、茶色と、茶トラの子猫が三匹。その猫の飼い主が、鳥井の悩みの相手だった。

(いい人なだけ)

やっと身体を起して頬杖をつく。ぼうつと脳裏に浮かぶ顔の方も、ボンヤリしている。元々、そういう顔の男だ。地味で、ちよつと先行き不安な髪の毛の量で、温和な顔立ち。これまでは、その男の事

をやさしくて一緒に仕事のしやすい人だ、と思いつつも男らしさを感じた事はなかった。気の遣い方もさりげなくて細やかだし、考えてみれば鳥井はその男には「手がかかる」と思った事はない。仕事の処理能力は、支店で一番だからだ。

が、彼は去年、季節はずれの台風が訪れた日、階段を落ちて行く鳥井を庇って自分が入院するほどの大怪我を負っている。

こんなに、男らしい人だったのか。

という驚きは、それから三か月を経てもなお、鳥井の胸から消えていない。しかし、そこですぐに「恋愛」とならないところが、鳥井らしさ。そのくせ、彼に頼まれた仔猫の世話には、自分も膝に怪我をして身動きがままならない状態でも、せつせと自宅に通った。おかげで、相手の両親にはすっかり嫁さん候補と思われる。

なにせ、会社からの連絡で男の両親が大慌てで田舎から出てきて、息子の自宅にやって来てみれば、そこには猫を抱いた見知らぬ女が立っていた。ひっかき傷にボサボサの頭、服もラフを通り越したジャージの上下。親が知らない間に同棲していたのか、と勘違いされても無理はなかった。もはや男の両親は、鳥井をすっかり嫁だと勘違いしたまま数日滞在しただけで、田舎に帰った。

「あとは、比沙子さんをお願いしますわ！」

と肩を叩いた親父の、つるつるげの頭に鳥井は男の将来を見た気がしながら、曖昧に頷いて見送った。よほど、女つ気のない息子の将来を悲観していたらしい。彼らがいる間、鳥井は自宅に戻れもせず、上にも下にも置かない扱いを受けて辟易したのを覚えている。が、いかにも男の両親らしい、という好感だけは消えていなかった。温和で明るくて、世話好きな両親だ。ずっと一人暮らしだったから、鳥井もすっかり数日間の同居を楽しませてもらっていた。

(やっぱり、別に買った方がいいかなあ……)

どうせまた、地下鉄に乗るために地下へ降りるのだ。その道筋が、百貨店の地下街でも変りはない。来週になれば、やっと男は職場に復帰してくる。そのお祝いという意味で、別誂えのチョコレートを

一つ。たいした意味はない。

それでも、悩む。

悩む理由は、簡単だ。

(恋愛つて、ドキドキするんだよねえ?)

しかし、男とはそれが無い。自分がせっせと男の自宅に通っているのは、猫の世話だけの事か。病院へ、洗濯ものやら下着やらを揃えて見舞いに行くのは、感謝と本来の世話焼きの性分のせいか。どうも、そこがわからない。

(だいたい、村田さんだつてどう思ってるんだかわかんないしね)

村田英悟、三六歳 男の浮いた噂など一度も聞いた事がない。

そういう話に縁のない男は、支店に多いから特別不思議とも思わない。仕事に熱中している時期の男連中は、あまりそういう部分に神経を向ける暇がないからだ。

(……でも)

あの事故の時の村田の男らしさに感動している自分がいるのも事実。その感謝の気持ちぐらいは表してもいいかもしれない、と相変わらず鳥井はグズグズ考えていた。

二月の第二週の月曜日、鳥井はふだん通りに出勤してきて、支店のパーティーションで区切られた営業のブースに村田のスーツ姿を見つけた。ドキリとした。

(え……あれ?)

なんだか胸が熱くなって、思わず涙が滲む。

「あ、トリちゃん」

と、村田が席に座って顔を上げる。立ち上がれば、村田の右足はまだギプスのままだ。それはとつくに知っていたのに、鳥井はちょっと自分も痛いような気になった。

ギプスといえば、村田の折れた鎖骨もテーピングされたまま。ここまで村田の復帰が遅れた原因は、折れた骨の破片が知らないうち

に内臓を傷つけていて、入院途中で緊急手術をしたせいだ。それやこれやの心配だった過去が、鳥井の頭に一気に蘇る。

そんな事とは想像もつかないらしい村田が、いつもの柔らかい笑顔で頭を下げている。

「今日からまた、よろしく。それと、僕が入院していたあいだ、本当に有難う」

つられて鳥井も頭を下げる。下げたまま、顔を上げられなかった。どんどん涙が溢れて止まらない。

「トリちゃん……？」

やっと恥ずかしそうに顔を上げて、鳥井は涙をこぼしながら笑顔になった。

「ベッドにいない村田さんを見られて、嬉しい」

エヘヘ、と笑いながらブラウスの袖で涙を男の子みたいに拭う。

そして鳥井は、今日の帰りにまた百貨店に寄って、やっぱり化粧箱に入ったミルク・チョコレートを買おう、と決めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7708q/>

ちょっぴり、しょっぱいチョコレート

2011年2月9日11時55分発行